

3歳児の仲間関係

～友だちに伝える気持ちの育ちに向けて～

第4回



共立女子大学
河原紀子

かわはら のりこ／早稲田大学人間科学部助手を経て、現在、共立女子大学家政学部教授。著書に『0歳～6歳子どもの発達と保育の本』（監修・共著、学研プラス）、『子どもと食：食育を超える』（共著、東京大学出版会）など。



前回までは子どもとおとなのやりとりを中心にしてきましたが、今回からは、3歳以降の子どもたち同士の関係について、考えていきたいと思えます。

わが国では、大半の子どもたちは3歳になると幼稚園へ入園したり、保育園では2歳児クラスから幼児クラスへ進級したりするなど、それ以前のおとな（親や保育者）とのかわり中心の生活から子ども同士のやりとりへと変化していきます。

やりとりの相手がおとなであれば言葉足らずな表現でも理解してもらえたり、行動から気持ちをくみとってもらえたりしても、子ども同士のやりとりではそう簡単ではありません。親としても、幼稚園や保育園で子どもたちが友だちとどのようにかわり生活しているのか、気になる場所でしょう。

そこで、今回は保育園で観察されたエピソードから、3歳児クラスにおける子ども同士のやりとりの実際、特にお互いの意図や気持ちにズレが生じる場面を中心にみた上で、3歳児でとりくまれている実践例を紹介します。

●3歳児クラスの子どものやりとりの実際

【事例1】相手の気持ちではなく行動から判断して

給食の準備をしているときのことです。保育室の一角にある配膳台から、子どもたちはご飯と味噌汁をそれぞれ席に運んでいます。

T美も自分の味噌汁を運び、次にご飯を運ぼうとしていましたが、Y子のご飯を持ってきて、T美の席の近くに置こうとするので、T

美は「わたしのとこ」と言ってそれを阻止しようとしています。Y子とT美がご飯茶碗を押しやり押し返したり：そのはずみで味噌汁がこぼれてしまいます。T美が泣き出すと、Y子は持っていたご飯茶碗を机に投げつけ「自分でやるから大丈夫」と甲高い声で言いました。二人が落ち着いた頃、保育者は各々がどうしたかったのかを尋ね、二人の席が隣だったため、お互いに相手が自分の分を運ぼうとしたと誤解してしまったようであること、投げると食器が壊れることなどを話して、その場をおさめています。

この二人のように、3歳児はまず自分のしたいことやしようとすることを優先しがちな年齢です。友だちについては、聞いてみる（言葉で確認する）ことなしに、行動のみからなにをしようとしているか判断してしまいます。そうして、感情が高ぶって大声をあげたり、手を出すなどの行動で表現したり、泣いてしまったりするのです。

続いて次の事例もみてみましょう。
【事例2】やりとりの過程であいまいになる気持ち

遊び場面でのことです。みんなでごっこ遊び用のスカートやエプロンなどをたらいの中ですすいで干す遊びをしていると、S介が「おれのだよ」と泣きはじめます。S介は保育者に、K男が洗濯バサミをとったことが嫌だったと泣きながら訴えます。保育者はS介に「K男は何が嫌かわからないよ」と言っていて、K男に伝えるように促しますが、S介は

K男に伝えられません。保育者はS介とK男に気持ちを確認するのですが、自分のしたことや気持ちが二転三転し、保育者がS介に「K男はいじわるしようと思っただけでどうした？」と聞くとS介はうなずき、続けて「K男はいじわるしようと思っただけなの？」と聞くと、K男もうなずいてしまう場面もありました。結局、S介の洗濯バサミをK男がとったのかさえあいまいになってしまいました。

「いじわるしようと思っただけ」かどうかどうか聞かれたことに対し、S介もK男も本当にそう思っただけなのではないでしょうか？

2～3歳の幼児はおとなから「はい/いいえ」で答えるような質問をされると、自動的に「はい」と答えてしまう反応（「肯定バイアス」）があると言われています。

加えて、3歳児は記憶を保持する容量が小さく、数字でいえば3桁から4桁を覚えるのがやっとです。そのため、子ども自身の当初の要求や意図自体がやりとりの過程であいまいになってしまふのかもしれない。

おとながトラブルの経過を聞いていく際、これらの点を踏まえておく必要があるでしょう。
【事例3】伝えたい気持ちに応じてもらえず給食がはじまる前のやりとりです。この日は、後で紹介する「二人組」の活動を試みていて、S子はC代と二人並んで座り食事をすることになっていきます。先に席に座ったS子、「C代、ここにしようよ」と言うが、C代はS子を見ているものの何も答えず、S子

は困って保育者に「聞いてくれない」と訴えます。しかし保育者からは、C代に伝えるように言われ、S子はその後も話しかけませんが、やはりC代は答えてくれません（後略）
事例1、2と異なり、S子は友だちに自分の気持ちを伝えることができているのですが、集団生活の経験や月齢、言葉の発達などに差があると、一方的なやりとりのまま終わってしまっています。仲間関係ゆえに、どのような組み合わせでも当然影響してきます。

●二人組活動について

子ども同士の関係をつくり、広げていくためには、一緒に遊ぶことやかわること楽しいと感じられる経験が大切です。そのなかで、子ども自身の伝えたい気持ちが育つとともに、相手の気持ちにも気づいていくことにつながると思われます。

そのことを実現するとりくみのひとつとして、「二人組」の活動があります。これは、複数の最小人数である「一人」という単位で、子ども同士がさまざまなかわりを体験するとりくみです。食事のときとなり同士に座ったり、お互いにボール遊びの相手になつたりなどがあります。

●二人組の実践

ここで紹介する「二人組」の実践は、「お買いものごっこ」です。二人でひとつの手さげを持ち、ぬいぐるみやお面、このために新たに用意された魅力的なおもちゃが置いてある机まで二人で行き、気に入ったものを袋に